

入
選

— 中学生以下の部 —

「カプチーノ・コースト」

竹内ミリヤさん

推 し 本：『カプチーノ・コースト』

著 者：片瀬チヲル

推したい相手：読んでいだけで心が落ちつく
そんな本を探している人



「カプチーノ・コースト」 竹内ミリヤ

昨日夜遅くまで起きていたせいかもしれないが九時というのに体が布団を離さない。必死に布団にしがみつくと体に少し同情したが、頭と枕にさよならを言ってもらった。のしっのしっとな階段を降り、寝癖ですんごいことになってる頭をかき回しながらトーストをかじる。朝ごはんを済まし、一通り支度を終わらした。車に乗りこみ、クリスマス一色の商店街を眺める。もう今年も終わるのか、とか今日のお昼何食べようか、とか考えているうちにショッピングモールについた。周りを見渡しながらいモールの中を進む。着いた先は本屋。なぜ本屋へ来たのかというと推し文大賞という作文のコンクールに応募するため。私はあまり本を読まないタイプでお気に入りの本とかも特になかった。だからこれを機にもう少し本に触れ合ってみようと思い、こうして新しい本を買いにきた。今まで出版社を見たり、ある一つの出版社限定で本を探したりしたことがなかったから結構楽しかった。色々なコーナーを見て回っていると一冊の本を見つけた。浜辺や少し汚れたクマの人形のイラストが表紙に描いてある。題名はカプチーノ・コースト。その本の帯を見てみると、「休職中の女性が海岸のゴミ拾いを通して自分を見つめ直す。」という内容だということがわかった。私がよく手に取る本は大抵ファンタジーだ。なぜかは自分でもよくわからないけど、魔法とか冒険とかいう言葉を聞くとわくわくする。だからこういうノンフィクションに近い本は少し新鮮で読みたいと思った。本をぱたんとひっくり返すと本文の一節がかかれていた。「今まで何度も海には来ていたけれど遠くまで広がる海と空ばかり見ていて足元に落ちているのに気づかなかった。見ないままですと、本当に見えなくなってしまうものだ。」その通りだと思った。私もよく海は行く。だけど海と空という大きな部分だけを見てしまっで足元に広がる本当の海、海の現状を見逃していると思った。気がつくとレジ待ちの列に並んでいる自分がいて正直ちょっと驚いた。本を抱えて家へ帰る。待ってました！というような勢いで本を開き、読み始めた。「今朝サメの子供が打ち上がったという。」その最初の一文で、私は物語の中へ入った。読んでいてまず思ったことが文章の書き

方、比喻表現などの使い方がとてもきれいだということ。こんな中学一年生の私が言っていることなのか分らないけど、とにかく美しい。多分美しいという言葉があつてと思う。少しふわふわしていて落ち着きがあるけど書かれている情景がはっきりと頭に焼きつく。物語のあらすじは主人公の早柚が海を眺めていたら海に腕時計を落としてしまいそれを機に海岸清掃を始めるというものだった。早柚は海岸で色んな人と出会っていった。青いスカーフを首に巻いた男性と会ったときは海で出会った人との関わり方。海岸清掃をしている年配の女性と会った時は海岸清掃ではトングを使うといいということと様々な人が清掃活動をしているということ。犬の散歩をしている女性と会ったときは普段海岸を歩いていてもその気にならない限り人工ゴミは目につかないということなども早柚は清掃活動を通して知ることができた。私も海に行くとき、海岸清掃をしている人を見かけることが何度かあるけど何かそういうきっかけがないと人工ゴミは目につかない。やっぱり海という壮大なものに気を取られて事実が見えなくなるんだなと思った。早柚はその後会社の同僚とバーベキューするために下見にきたという男性にも出会った。その男性は早柚に海岸清掃をする理由を尋ねる。早柚は「拾い始めると、結構楽しいですよ。綺麗になると嬉しいですし」と答えた。でもその男性は言った。「それで何が変わるんですかね」何もしてない人が何か行動を起こしてる人に言える言葉なのかと私はこの返答に対してイラっとした。早柚自身も自分が人が捨てたものを拾って何か崇高なものを目指している訳ではないと言っていた。私もこの本を読んで海岸清掃をやってみたいと思った。決してそれが何かのためでなくても何か行動を起こすこと自体に意味があると思うし、それに完ぺきを求める必要もない。そういうことを教えてくれる一冊だった。読んでいるだけで心が落ちつく、そんな本を探している人に私はこの本を推したいと思う。